



第 29 号

2014年12月26日発行



開館直前の文書館（左）と旧文書館玄関の表札（右）

藤沢市文書館（以下、「文書館」と省略します）は、さる7月1日に開館40周年を迎えました。今から40年前、文書館に相当する施設は都道府県立でもわずかであり、まして市町村立では下関市立長府図書館の附属施設である下関文書館のみで、単独の文書館施設としては藤沢市が最初でした。

開館当初から、文書館の建物は現在地（市内朝日町12-6）にありましたが、40年前の建物は元の横浜地方法務局藤沢出張所（「登記所」と呼ばれていました）の庁舎を転用した建物で、開館後約10年間使用された後、昭和60（1985）年2月に現在の3階建ての建物に建て替えられました。また、右側の写真におさめられた表札は、文書館運営委員会初代委員長の故児玉幸多氏（学習院大学名誉教授）の筆によるもので、当時を語る資料として、今も大切に保存されています。（中村）

（参考：「文書館改築の経過と概要」『藤沢市文書館紀要』第8号所収、1985年）

もくじ

開館直前の文書館と旧文書館玄関の表札……………	1
文書館開館40周年特集 ……………	2・3・4

岸田劉生『鵲沼日記』を読む……………	4
編集後記……………	4

文書館開館40周年特集

今から40年前の昭和49(1974)年7月1日、藤沢市文書館は開館しました。

その当時、地域の古文書だけでなく、行政事務の過程で作成された公文書も同時に保存する役割を持つ「文書館」という施設は、全国的にもまだ数少なく、図書館などの付属施設ではなく単独で市町村が設置したのは、全国で初めてのことでした。

ここでは、藤沢市文書館が、なぜ、どのような経緯で開館に至ったのかを振り返ってみます。

★文書館設立準備としての市史編さん事業

文書館設立の責務を担ったのは、市史編さん委員会と、市史編さん事業の事務局である市史編さん室でした。本来、市史編さん委員会の役割は、『藤沢市史』の企画・執筆であり、実際、文書館が開館するまでに2冊の市史を発行しています。そうした中、なぜ市史編さん委員会は、文書館の設立についての積極的な役割を担ったのでしょうか。

一般的に、自治体史を編さんするためには、自治体内外に残されたその地域の古文書などの歴史資料を探し出し、整理し分析した上で執筆します。収集した歴史資料は、マイクロフィルムなどで撮影して、所蔵者に返却されますが、寄贈されることもあります。しかし、藤沢市に先行して自治体史を完成させた自治体では、編さんを担った組織が完成と同時に解散し、収集した歴史資料の保存場所もなくなったことで、散逸させてしまうこともありました。

このような過去の自治体史編さんに対する反省から、当時の藤沢市史編さん委員長の児玉幸多氏は、藤沢市史編さん事業開始当初の第1回打合会（昭和42(1967)年1月開催）で、市史編さんの過程で収集される歴史資料を保存する施設を置くことを、金子小一郎市長（当時）に対し強く要望しました。そして、開始した市史編さん事業で収集された歴史資料は、将来的には保存施設で保存し、市民へ公開することを前提に調査・研究が進められました。

特に、歴史資料の目録については、『藤沢市史資

料所在目録稿』として刊行しました。歴史資料を撮影したマイクロフィルムは、閲覧しやすいように紙に焼いて製本し、目録を作成して『目録稿』に掲載するなどしました。

当時の市史編さん委員で、現文書館運営委員会委員長の圭室文雄氏は、「藤沢市史編さんの仕事が文書館の準備作業であったといっても過言ではない」と当時を振り返っています。

★市民の歴史への関心の高まり

市史編さん委員会は、市史編さんの過程で明らかになった藤沢の歴史について、『藤沢市史』を発行するに留まらず、さまざまな形で市民に公開してきました。

そのひとつ市史研究会は、昭和44（1969）年2月に開始し、ほぼ1ヶ月に1回程度開催されました。この研究会は藤沢の歴史に関心ある人であれば誰でも参加することができ、藤沢の歴史についての研究の成果を、時代・テーマを問わずに報告することができました。また、古文書の輪読会も行いました。

『藤沢市史研究』は、A5版で約100ページの冊子で、「歴史保存に関する市民と研究者を結ぶ唯一の専門雑誌」という位置づけで、現在も刊行が続けられています。藤沢に関する資料や研究を公開し、読者である市民とともに、さまざまな立場から検討を加えることで、藤沢の歴史事実の解明に迫ることを目的としました。市史研究会の報告が論文として掲載されることもありました。



市史展示会の様子

その他に、新出資料を展示（市史展示会）して、

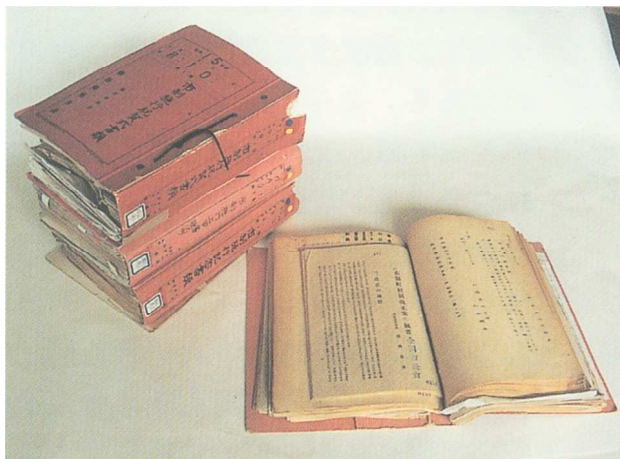
市民が直接目にする機会を設けることもしました。

このような、市史編さんの成果を市民に知らせ、市民とともに『藤沢市史』を作り上げていこうとする活動によって、藤沢の歴史を語り継ぐことの大切さ、そのための歴史資料を保存し、後世に伝えなければいけないことが市民に浸透していきます。その現れが、昭和48(1973)年10月に市議会議長宛に提出された陳情書でした。これらは、各地区の資料所蔵者が、先祖から伝えられた歴史資料の価値を理解し、その一方で、藤沢市が首都圏のベッドタウンとして開発が進むなかで子々孫々伝えていくことに困難を覚えたことから、恒久的に保存する施設として、文書館の設置を求めたものでした。

陳情は、同年12月15日の市議会総務企画常任委員会で趣旨了承されました。

★公文書の管理・保存と文書館

市史編さん事業を進める中で、藤沢市の近代・現代の歴史を明らかにする重要な公文書が、完全な形で保存されていないことが明らかになってきました。そこで、作成された公文書を文書館が収集して管理し、専門的な知見のもとで保存すべきものを保存し、残りを廃棄する制度を作り上げる必要性が課題として浮かび上がりました。



市の永年保存文書

昭和47(1972)年9月の市史編さん委員会では、同年2月に初当選した葉山峻市長（当時）との懇談が実現します。ここでは、「文化財保存施設に留まら

ず、地方自治問題の延長線にある性格」を持つ文書館像が話し合われました。今では具体的な内容は明らかではありませんが、古文書の収集・保存だけでなく、行政への住民参加の一助として、公文書や市役所で作成された刊行物などを市民に公開する施設について話し合われたと思われます。実際、同年12月には市役所内に「市民資料室」が文書館に先行して開設され、現在の文書館の市民資料室となります。

また、同年9月の市議会で、失われゆく文化資料について質問がありました。そこでは、古文書の保存に留まらず、公文書についても注目し、公文書が作成されてから廃棄されるまでのチェック体制や、廃棄される公文書から歴史資料を収集する作業について確認したいというものでした。

同年11月1日には、市史編さん委員会から、「文書館建設に関する要望書」が提出されます。ここでは、古文書のみならず、明治以降の公文書の保存、利用もできるようにし、日々作成される公文書と合わせて集中管理する施設として、文書館の建設を要望しました。

★文書館の設立

その後、市史編さん委員の有志により「文書館設立準備委員会」が設置され、翌48年5月には市史編さん室に「文書館建設調査委員会」が正式に発足します。この委員会は、日本各地にある文書保存機関を視察するなかで、藤沢市の文書館として果たすべき機能、さらには必要な施設や人員の配置などの研究調査を行い、文書館の設立を望む市民とのパイプ役となりました。

調査委員会の成果は、同年8月に「藤沢市文書館建設についての報告書」としてまとめられ、児玉幸多委員長から葉山市長へ答申されました。

翌49年には、市内朝日町12-6にあった横浜地方法務局藤沢出張所の建物が市に移管され、改修工事が行われました。そして同年6月の市議会定例会で「藤沢市文書館条例」が可決され、7月1日に文書館が開館したのです。

★まとめ

古文書・公文書を問わず文書館の資料を通じて、過去の藤沢市を知り、現在とそして将来の藤沢市について、市民の皆さんに考えていただくことができれば、何よりです。そのような文書館になるよう、努力を続けて行きます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(山田) (参考：圭室文雄「藤沢市文書館の開館によせて」『地方史研究』第131号所収、地方史研究協議会、1974年、「文書館設立に関する準備経過記録」『藤沢市文書館紀要』第1号所収、1975年)

岸田劉生『鵠沼日記』を読む

—大正期の洋画家の食生活—

●劉生と鵠沼

特徴的な作風の「麗子像」で知られる洋画家・岸田劉生(1891～1929)は、大正6(1917)年2月から大正12(1923)年9月までの間、鵠沼に住んでいました。劉生が移転したのは、医者から結核との診断を受けたため、知人であった白樺派の一人である、作家の長與善郎(1888～1961)の援助なども得て、26歳の時に妻や娘の麗子などを連れてきたのです。

転居後、関東大震災で被災して名古屋方面に避難するまでの間に綴られた『鵠沼日記』と題された彼の記録からは、鵠沼での日常生活の様子が垣間見えますが、今回は、その中から食生活に関する興味深い記述を取り上げてみたいと思います。

●鵠沼の洋食屋

大正9(1920)年に、鵠沼にも洋食屋ができたことが7月16日の記述からうかがえます。

夕食には今度鵠沼に出来た洋食屋からコールドビーフをとつてみる。わりにうまかつた。

ここに出てくる「コールドビーフ」はローストビー

フを冷やしたものです。劉生はこの洋食屋が気に入ったようで、夜食をとったり、友人や弟子たちをもてなす時に用いたりして、このあとの日記に何度もでています。

この洋食屋は現在の鵠沼海岸2丁目にあった「有田」だと思われます。ちなみにこの当時の主人は、藤沢町会議員も務めた有田金八で、後に鵠沼海岸自警団の団長として、関東大震災の被災者救出に尽力した人物でもありました。

●岸田家の正月料理

岸田家の毎年の正月料理について、同じ年の12月31日の記述によれば、

玉半からお正月のうまさうなのが沢山出来て来て居て麗子大喜び。

とあります。ここに記された「玉半」は、藤沢の川岸(藤沢橋の南側)にあった有名な割烹でした。しかし玉半は関東大震災で大きな被害を受け、喜楽町(藤沢駅北口で、柳通りから、藤沢市商工会議所に向かうあたり)に移転しました。

●余裕が感じられる食生活

その他、藤沢町内の寿司屋からうなぎをとったり、鵠沼にあった割烹旅館の東屋のビアガーデンにいたりしています。さらに、日記のなかにある料理品目には、ライスカレー、カツレツ、コールドチキン(ローストチキンの冷製)などがでています。このように劉生の日記には、一般の人々に比べ、大正期の文化人として、ハイカラで余裕が感じられる食生活が記されています。(伊井)

(参考：岡田哲明「かわせみ学園放送講座講義録 岸田劉生と鵠沼(2)」『鵠沼』第103号所収、鵠沼を語る会発行、2011年9月)

編集後記

今回は、文書館開館40周年記念として特集を組みました。日本では、文書館という制度がなかなか普及しませんでした、最近になって市町村において

も相次いで開館されています。多くの方々にとって公文書などの記録の重要性が、少しずつ理解されるようになってきたともいえます。今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。(中島)